ボリバル広場からアンデス山脈に向かって伸びる路地、コロニアル調の街並みが続く

欧米を中心とする投資ラッシュが続くコロンビア。経済自由主義を標榜し、貿易・投資の促進を通じて国内の持続的成長の達成を狙う開放政策が功を奏している。二〇〇二～一〇年の二期八年に渡り大統領を務めたウリベ前大統領の功績といえよう。現在は、前政権中に国防大臣（〇六年七月～〇九年五月）を務めたサントス大統領（一〇年八月就任）に継承され、更なる飛躍が期待される。二〇〇八年に日本との修好一〇〇周年を迎えたコロンビアを概観したい。

■フォトエッセイ■

遠くて近い　コロンビア

写真・文
藤本雅之
Masayuki Fujimoto

コロンビアといえば、コーヒーが日本でも馴染みが深い。缶コーヒーやインスタントなどいわゆる普及品から、高級志向のプレミアムコーヒーや有機豆まで幅広く愛飲されている。

コロンビアの全国コーヒー生産者連盟（FNC：Federacion Nacional de Cafetero）が経営するファン・バルデス（Juan Valdez）というブランドのコーヒーショップ・チェーンが国内主要都市に点在しており、老若男女問わず市民の憩いの場となっている。気候の良さも手伝い、テラスでコーヒーを楽しむ文化が定着しつつある。エスプレッソからフローズンコーヒーまでメニューも豊富だ。

近年では、NYマンハッタンの他、北米の主要空港内、近隣諸国のチリやエクアドル等へ出店が続き、コーヒー生産国のコーヒー・スタンドとして味に定評があり人気を集めている。国内外で約一五〇店舗が展開される他、さらにスーパーマーケットなどの販売店舗数を含めると約二〇〇〇店舗を数える。東海道新幹線での車内販売のコーヒーが、この「FNC」というロゴが入るコロンビア産であることに気付く人は多くないだろう。コロンビアの対日輸出努力の賜物だ。

一九二〇年代には世界のコーヒー生産量の一割に達するまでの重要産業に育っており、今日ではブラジル、ベトナムに次ぎ世界三位の生産量を誇る。国内七四万人の雇用と家計を支え、輸出全体の五～六％、農産品輸出に限ると三割を占める重要な労働集約型の輸出産業だ。アンデスの山間で生産されるため収穫に農機が使用できず、全て手摘みであり、結果的に良い実の選別が可能となり、高品質につながっている。現在は従来の生豆としての輸出に加え、焙煎加工した豆を「一〇〇％コロンビアンコーヒー」と銘打って商品展開するなど、高付加価値化を目指す努力が続く。EU市場に対しては、「Café de Colombia」の名称で地理的表示保護の認証を取得しており、ブランド作りや売り込みに余念がない。日本が輸入するコーヒー豆の約二割がコロンビア産で、ブラジルに次ぐ二位の輸入先国となっている。駐在から日本に戻り、豆から挽く香り高い味わいを楽しむことが、「日常」から「週末の贅沢」になってしまったが、今でもこの豆が入手できるのは有り難い。

母の日といえばカーネーションが定番だ。実に日本が輸入する七五％がコロンビア産とダントツ

ロバと農夫がキャラクターロゴのJuan Valdez Caféでコーヒータイムを楽しむ

ボゴタ旧市街の中心ボリバル広場を見下ろす三〇〇〇m級のアンデス山脈

一位だ。二〇%を占める中国産を大きく引き離す。ピークは母の日商戦の五月だが、端境期なく一年を通じて日本の厳しい植物検疫をクリアした生鮮花卉（かき）が空輸されるのが強みだ。九〇年代から政府が根気良く取り組んできた対日輸出努力の結果だ。カーネーションの他、バラ、菊、蘭など多くのバリエーションの花を主にカリブ海を挟んだ最大の貿易パートナーである北米に輸出する。

カーネーションやバラの多くは、海抜二六〇〇メートルの標高にある首都ボゴタの近郊で栽培される。赤道に近く昼間は常夏でも高原性気候のため夜は摂氏一桁台まで冷え、上着がないと寒いくらいだ。この昼夜の寒暖差が茎を強くし、保水性を高め日持ちする高品質の花をつくると評価される。その上、バラ一ダースの花束で三〇〇円程度と安価だ。南米大陸から遙々日本に空輸される所以はここにある。二二万人の職を提供する、コーヒーに次ぐ重要な農産品だ。いずれも高原が栽培に適す植物であり、国土を悠々と縦断するアンデス山脈の恵みといえる。ちなみに蘭はコロンビアの国花であるが、その種類は野生も含め三五〇〇種確認されており生物多様性の豊富さが伺える。

天然資源も豊富だ。最大の輸出品目である原油（含む派製品）は輸出全体の三～四割を占め、石炭など他の鉱物を含めると五割に達する。日本はステンレスの原料であるフェロニッケルを輸入しており、コロンビア産のシェアは二位と、コーヒー、切花に次ぐ三大コロンビア産品だ。石炭もカロリーが高く良質と評され、近年輸入が増えつつある。

豊富な降雨量とアンデス山脈に群がる水系のお陰で水資源も豊富だ。この恩恵を最大限活用しており、国内の発電量の六～七割が水力とエネルギー事情は実にクリーンだ。二〇一〇年はラニーニャ現象により降水が多い年となったため、総発電量のうち七一%を水力が占めた。残りの殆どが火力だが、雨の少ない季節のみに稼働する発電所があるほどで補完的だ。火力のうち七割が自国で産出した安価な天然ガスを原料としており（残りも自国の石炭）、火力発電においても排出する温室効果ガスが少

標高3,100mのモンセラッテの丘から望む2,600mの首都、丘の上には教会とレストランがある

ボゴタ郊外の観光地ビジャ・デ・レイバ、中腹に立つ荘園を改築したホテル、アンデスの頂上にも関らず海の恐竜クロノサウルスの化石が発見された地だ

アンデス山脈に囲まれた広大な農地・牧場（日系人が移住した街カリにて、近くにはサトウキビ畑が広がる）

年間稼働率が50%程度の火力発電所パイパ（ボゴタから車で3時間程度）

カリブ海に面した工業都市バランキージャの港、
コンテナー取扱量では国内3位。有名歌手シャキーラはこの街出身だ

ない。水力・火力共に、歴史的に日本メーカーの発電機が導入されている。「品質・性能重視で、少々高くても故障が少なく結果的に割安」という判断とのこと。余剰電力については、隣国のエクアドルやベネズエラにも輸出するなど送電インフラ・サービスの整備も進む。

クリーンといえば、政府の推進により、サトウキビを原料とするバイオエタノールの生産も着実に増えている。現在、六社が日産一二五万リットルを生産しており、自動車用燃料へ八%混入（E8）し国内市場に供給している。原料のサトウキビは太平洋よりのアンデス山脈に囲まれた盆地に位置するバジェ・デル・カウカ県（カリ市）を中心に、三県を跨ぐ二二万haに及ぶ大規模な栽培が行われている。カリは人口第三位の都市であるが、海抜が一〇〇〇メートルとボゴタに比べると低地であり、気候も随分とトロピカルになる。一年を通じて強い日差しが降り注ぐうえ、南国特有のスコールによる雨、肥沃な土地を有する。気候と土壌がマッチし、二毛作が可能だ。古くから地場に根付く製糖産業に原料高騰などの影響が生じないように、政府は両者に対し最低価格保証をしており食糧との共存バランスも確保している。

さらには、アフリカパームを原料としたバイオディーゼルも国内七社が生産しており、燃料への一〇%混入（B10）が普及している。椰子の生産はカリブ海沿岸を中心とする熱帯地域に集中しており、バイオ燃料の普及も同地方が先行している。こうした再生可能エネルギーの他、京都議定書合意によるCDMプロジェクトも積極的に参画するなど環境フレンドリーな国だ。国内一五四プロジェクト中六六件が政府承認済みで、うち三二件が国連気候変動枠組条約事務局に登録されており（九件はCERクレジット取引実施済み）、中南米ではブラジル、メキシコ、チリに次ぎ四位のプロジェクト数となっている。

日本の三倍相当の国土を誇り、アンデスの恵みのみならず、大平原の恵み、さらには地下資源までと自然の恵みを最大限活用している。こうして見ると資源国一色に映るかもしれないが、それだけではない。コロンビアにはモノ作りの歴史があり、日系の製造業も自動車、自動二輪、エレベーター等、三〇余年に渡り現地で操業する。日本の技術力への信頼も高く親日国だ。

現地組立生産を行う日系自動車メーカーの工場、自然光を取り入れた照明いらずのエコな工場だ

カリブ海沿岸の独特なカラフルの衣装を身に纏った女性。
フルーツを買う代わりに1枚撮らせてもらった（世界遺産のカルタヘナにて）

メデジンで毎年8月に開催される花祭り、Silleterosと呼ばれる花輪を背負った担ぎ手（農夫）のパレードが見どころ

カリの日系人協会主催の移住80周年式典にて3世代で記念撮影。コロンビア政府からは文化大臣の参列を得た

南米には数少ない現役のスペイン式闘牛場（ボゴタ）、1～2月の本国オフシーズンに本場の闘牛士が駆けつける、この日は若手闘牛士のToroが開催されていた

どこの工場をお邪魔しても「KAIZEN」や「5S」のスローガンが掲げられており、日本的モノ作りの精神が浸透している。進出日系企業による地元労働者に係る評価は、器用で仕事も丁寧と極めて高い。自動車では二社が現地生産を行うが、年間二五万台の新車が売れる市場規模であり大国との比較では見劣りするものの、人口は中南米三位の四六〇〇万人を擁し、個人消費の拡大に伴って市場として有望視される。さらに人口の約七割が四〇歳以下と若い国で、総出生率も二・五人と高齢化や少子化問題とは無縁だ。貧富の格差の是正が政府の優先課題に挙げられているが、同対策が功を奏せば益々の購買力向上が期待できる。

日本とコロンビアの関係は、一九〇八年五月二五日に外交関係（修好通商航海条約）の樹立にはじまり、二〇〇八年に外交修好一〇〇周年を迎えた。さらに、日系人の歴史も長く、一九二九年に第一回の集団移住者が到着して以降、カリ市を中心にコロニーが形成され、二〇〇九年に八〇周年を迎えた。こうした外交関係の深化に呼応するかのように日本企業の活動も活発化し、日本とコロンビアのEPA待望論が声高になり、政策提言を目的とした民間レベルのEPA研究会（事務局：ジェトロ）が二〇一一年七月に終了している。太平洋諸国でありながらAPEC加盟国に名を連ねておらず、この悲願の加盟を果たすことが中南米における、アジアへのゲートウェイを標榜する現政権の主要課題のひとつだ。太平洋側のカリ市には日系人の活躍の歴史がある。モノ作りの日本と資源国、あるいは有望市場のコロンビア、補完関係にある両国が、向こう一〇〇年にどのような緊密化を見せてくれるか大いに期待したい。

ふじもと　まさゆき／アジア経済研究所研究企画課課長代理
一九九五年よりジェトロ勤務。ボゴタ事務所所長として、二〇〇六年八月～二〇一〇年一〇月まで滞在。
二〇〇〇年一〇月～二〇〇四年二月には、在ウルグアイ日本大使館に経済担当書記官として出向。